
慈 恵



令和 2 年 No.70

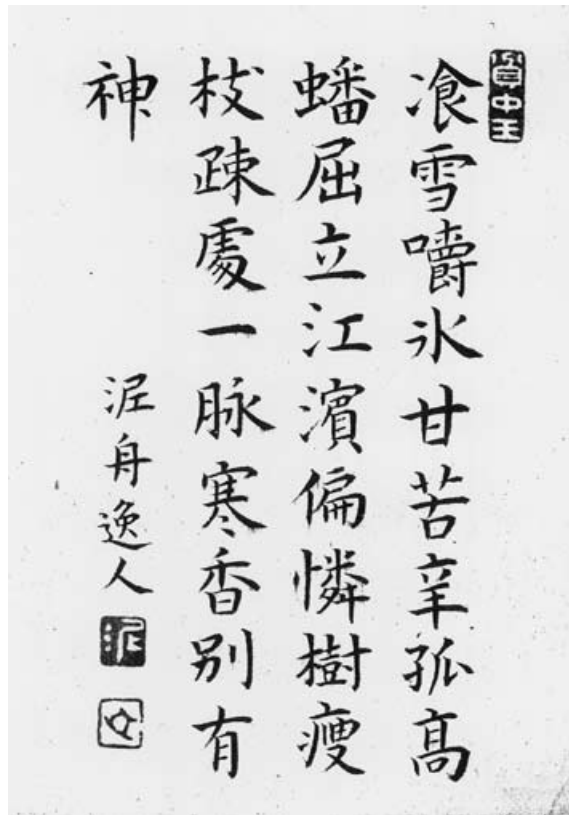


春

宗教法人 慈 恵 院

付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



雪を喰い氷を嚼^かみ苦辛に甘じ

孤高蟠^{ばんくつ}屈江濱^{ひん}に立つ

偏に憐れむ樹瘦せ枝疎なる處

一脉^{みやく}の寒香別に神有り

泥舟逸人

高橋泥舟^{たけはしでいしゅう}

幕末の幕臣。槍術に秀で、国事に通じ、講武所教授となり、一八六三年（文久三）新徴組を統率。鳥羽伏見の戦後、恭順謹慎説を主張。江戸城明渡し後は徳川慶喜を護衛。山岡鉄舟・勝海舟と共に幕末三舟と称。（一八三五一—一九〇三）

妖は徳に勝たず

明治元年、泰龍は妙心寺本山と師匠雪潭の命で伊深の正眼僧堂に入寺した。時あたかも維新直後で、西洋の文化が流入し、社会では排仏の動きが沸騰していたところである。多くの僧侶たちは狼狽してなすところを知らないふうであった。

そんな世間の動きを少しも顧みず、泰龍は数十人の雲水と枯淡をなめて、摂心に明け暮れていた。ある日、語っていた。「邪は正に適さず、妖は徳に勝たずだ。わしらがここで特段の奮発をせねば宗風はまったく地に落ちてしまおうぞ」

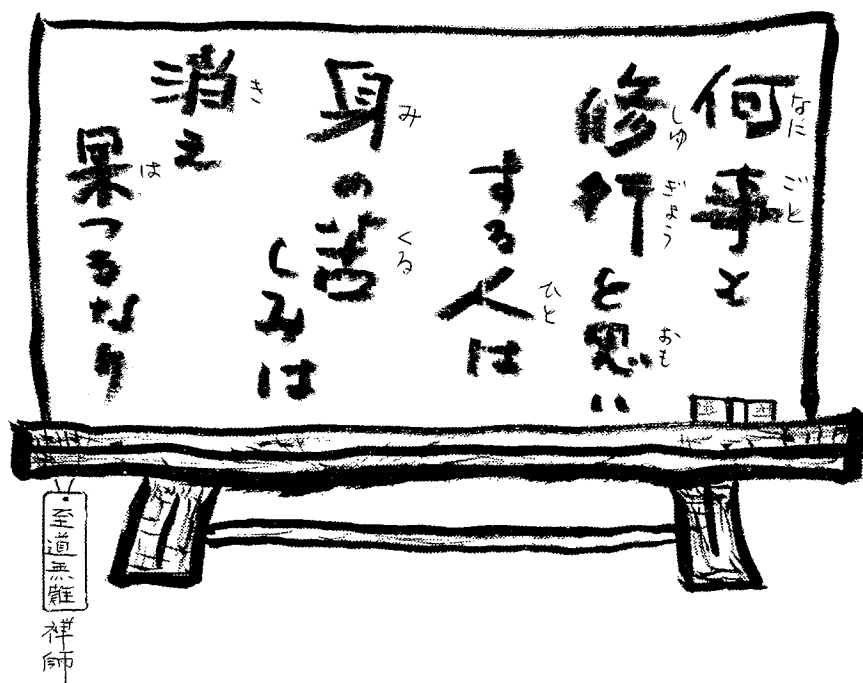
果たして正眼僧堂の宗規は大いにふるい、門庭は屹立とし多衆が集まったのである。

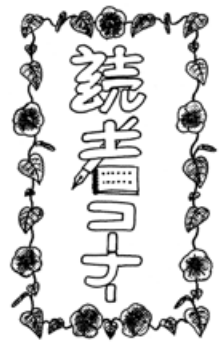
◇摂心…集中的に坐禅をする期間のこと。

泰龍文彙 (二八二七〜一八八〇)

臨済宗。尾張の人。十七歳の時、慈雲寺の松蔭について出家したのち雪潭に参じること十九年、ついにその印記を得た。紀伊の大泰寺に入ったのち伊深正眼寺に住し、雲衲を接得した。

揭示板





阿弥陀さま
まだ迎えにこないで
下さい

墨田区 稲田 武士(79)

私は平成30年、慈恵63号に私が死んだら阿弥陀さまと9匹の犬達が「お父さんがきたよ、お父さんが来たよ」と大よろこびで先を競って私の顔をなめてくれるでしょうという作文を書いた者です。

もう79歳なので、今いる犬ラックで犬を飼うのはおわりにしようと思っていたので、近所で夫婦別れをして、2人の子供と

犬2匹のプードルをおいて出ていったそうです。3歳と4歳の犬が我家で暮すことになりました。

人間が一番残酷ですね。世界のどこかで戦争をして人が人を殺し、平気で犬や猫を捨て、一番弱い立場のものを、守ってあげなくてはいけないと思います。

今の政治はどうでしょう。金持ちはますます金持ちになり、権力者はえびらちらかし、もつと老人、子供、貧乏人など弱い立場の方へ目を向けてほしいものです。

阿弥陀さま、お願い、今度来たプードルのためにあと10年は私を迎えにこないで下さい。

口下手なインコ

清瀬市 綿貫 利津(40)

幼少の頃もし鳥を飼ったとしたら、一緒に楽しくおしゃべりしてみたいと空想したこともありました。しかしながら、現実はなかなか思い通りにいきませんでした。

我が家にやってきたボタインコの熙ひろは決して無口な子というわけではなく、鳥らしく饒舌で、外で飛んでいる雀のさえずる声に合わせて「ピーピー」言っていました。しかし、残念ながら人語を喋る気配は微塵もありませんでした。ささやかながら毎日「おはよう」と声をかけて、期待に胸を

膨らませていましたが上達の兆しはまったく見られず、熙自身におしゃべりの素養はありませんでした。

鳥とおしゃべりしたいという私の夢はあえなく潰つぶえましたが、熙は手乗りインコだったため、とても人懐っこく、よく私の後にくっついて来ました。羽を切っていたため彼女の移動はもっぱら徒歩が主になりますが、関節がない2cm足らずの短い脚を目にも止まらぬ速さで左右に出しながらちよこちよこ人をおっかけて行く姿にはとても癒されました。また自分の背丈の倍近くある階段の段差も翼をばたつかせ、「ピー」と自分を鼓舞するかのようには鳴きながら一段一

段上って行く姿には氣骨を感じました。たまに氣力が尽きたのか階段の半ばで助けを呼ぶように「ピーピー」とけたたましく鳴くこともありましたが、顔を見せて名前を呼ぶとまた上り始めました。自分の名前が熙であることもちゃんと理解しているようで、名前を呼ぶと一目散に駆けてきました。暗くて狭い場所が安心するのが近付いてきては洋服の中や股の間に入ろうとするのには難渋しました。また高い場所がお気に入り、立っている人のズボンにしがみついて嘴と2本の脚で一路頭頂部を目指して器用にクライミングをします。頂上にたどり着くと決まって、勝利の雄叫びよろしく「ピーピーピー」と誇らしげに鳴いていました。

小さな女の子でしたがかなり傍若無人で、インコは長ければ10年以上生きると聞いていたのでこれは長生きするぞと家族全員思っていました。歩き方が変だなと思ったら、うずくまってしまい、急に動かなくなりしました。本当にあつという間で悲しむ時間もありませんでした。今でも短い脚を一生懸命動かしてついている「トコトコ」という足音が忘れられません。おしゃべりはできませんでしたが熙が私達のことを慕ってくれていたことは伝わっていました。熙にも私達の思いが届いていたらいいと願わずにはいられません。

春 づ ー よ み

5 月	4 月	3 月	当山行事
	4 / 5 降誕会 (花まつり)	3 / 23 明け 3 / 20 中日 3 / 17 入り 彼岸会	
5 / 20 小満 ●小満やあやめにまじる 薄荷草 (那須弥生)	4 / 19 穀雨 ●伊勢の海の魚介豊かにして 穀雨 (長谷川かな女)	3 / 5 啓蟄 ●啓蟄のものの驚かせ 午後の風 (星野立子) 3 / 20 春分 ●春分の入日簀子に 今滾つ (行人)	二十四節気
5 / 1 八十八夜 ●鯛の尾の張りし立夏の 背負籠 (青木緑葉) 5 / 3 憲法記念日 5 / 4 みどりの日 5 / 5 端午の節句 (重箱の節句) 5 / 10 母の日	4 / 29 昭和の日	3 / 3 上巳の節句 (桃の節句) (雛祭り)	祝日等

過去に在る刻を現在思う

木村動物病院

院長 木村 譲

30数年前に東京都ペット愛好会という名称で伴侶動物を飼う方のための小冊子を企画・発行したことがあり、先代の父（木村喬）が文章を書き、画家をしていた叔父（木村鐵雄）が挿画を描いたことがありました。

在の病院のロゴマークにもなっていますが、昔、黒いスコッチテリアを飼っていました」と猫の絵の記憶を頼りに現在、手許にあるたつた一冊の小冊子【図1】に巡り会うまでに十数日を費やしました。

確か慈恵院（多磨犬猫霊園）さんに配布していただいたような気がします。この寄稿文の依頼を受ける迄、その存在のことは暫く忘れていて、そういえば此処ら辺にあった筈という淡い期待にも裏切られ、いつまでも網膜に余韻として残り続いていた表紙の色（萌葱色）と叔父の描いたテリア犬（現

下日獣）を卒業して帰郷する方と向かい合ったことで、その後の人生が決定づけられました。昭和22年のことでした。商船（日本郵船）の機関長をしていた祖父（木村孟一）は昭和19年陸軍に輸送船として徴傭された船（長城丸 東亜海運）に機関長として奉公した際に、ミンダナオ島ラモン岬東方沖にて雷撃を受けて戦死、長崎の中学校は原爆で壊滅、上京した昭和22年の東京は未だ焼け野原が多く、神田駅の側の闇市で芋飴のふかし饅頭によくお世話になったそうです。国分寺の畑の中のお寺の本堂に下宿し、アルバイトで立川米軍基地へ重労働をするために入りましたが、少し英語が話せたことから女性検査官の下で労働者との通訳を勤めさせられました。その後は、鎌ヶ谷の日獣実習牧場に住み込み、牛舎の牛の世話話は勿論、毎日牛乳を担い

で東京へ、超満員の総武線は乗り降りに一斗缶が2本入っているリュックを下げている脚は宙に浮き、出口まで何回か回転しながら身体を運ばれたそうです。海軍時代の外套【図2】は立派で頑丈に作られていましたが、12個の金ボタンは丈夫な縫糸の部位では千切れずに、布地の方が破れて二冬で殆ど無くなってしまいました。学費や生活費は一年二学期以降全て自ら働いて作り、様々な所で様々な貴重な経験をしたようです。卒業してからは憧れの牧場（北海道、町村牧場）へ、半年目に牝牛に蹴られて（本人曰く可愛がられて）肋骨にひびが入ってしまったところに、母校（日獣）から東京都で狂犬病予防員が必至との連絡あり、新しく発足した警察予備隊（後の自衛隊）に行こうかとも迷ったようですが、怪我のこと